岳精流日本吟院

ちよだ

第３３号

平成２１年１月

千代田岳精会弘報

平成二十一年度岳精流指標

今が人生だ

「話」と「和」で「輪」を広げよう

会長　鈴木　龍成

新年明けましてお目出とうございます。

皆様お揃いにて良き年をお迎えのことと存じます。

全世界を覆う不況の嵐、忌まわしい事件の数々、私どもをとりまく平和を脅かす事態が起こっている今日この頃ですが、少なくとも私ども庶民の日常の生活には安寧をもたらしてくれることを願うや切というところです。

昨年十一月廿二日の「千代田岳精会温習会」では、担当の四教場（丸ノ内第一、東陽町、丸の内女子、鎌ヶ谷）の企画、運営と関係各位の支援のもと、会員全員が協力結集の結果、見事な大会が展開されました。会場の確保から日程の設定、内容の企画等事前の大変な準備と当日運営のご苦労には感謝の言葉も言い尽くせません。

特に今回大会が、新会員の皆様にスポットを当てようとの基本方針で貫かれていましたが、その狙いも見事に成功したと思います。独吟コンクールでの堂々たる吟詠振りや、今年入会の三十有余名の方々を中心とした新人会員の合吟も見事でした。

三月の「全国独吟コンクール」えの支援に始まって、四月の「昇伝審査」六月の「全国吟道大会」そして今回の「温習会」と、盛り沢山の年間行事を無事終了したことになります。

さて、迎えた平成廿一年、私たち千代田の仲間は「千代田岳精会讃歌」にも歌われている、〝輝く流統を身に負いて吟声を轟きわたらせる〟元気溢れる年にしたいものです。「のびのびわくわく　さわやか　ちよだ」のスローガンのもと、昨年新しい拠点が二か所（志茂、代々木）誕生したのをはじめ、新しい吟友を迎えて各教場も活気づいています。この活気こそ私達の前進のエネルギーです。

家元・横山岳精先生の「語録」のなかに「吟の輪を広げよう　吟の和を深めよう」という言葉があります。私たちは今まさに、活発な教場活動を通じて新しい吟友を中心に吟友の〝輪〟を大きく広げようとしています。そして日頃の語らい〝話〟と研鑽のなかから千代田結束の〝和〟が深まってきています。この新しい年こそ〝集う我らに栄えあり〟（千代田岳精会讃歌から）の年にいたしましょう。

右の目標実現のため、次の事を重点に取り組みたいと思います。

①新しい五拠点の新設により、新らしい会員の増強。

②楽しい活気溢れる教場づくり（教場研修参加率向上）。

③初期研修を中心に、諸研修を充実。

④温習会の新しい開催方式の検討。

最後に「輪」の広がりにつながる明るいニュースを報告いたします。神田教場の会員Tさんの関係で、ある社会奉仕団体からの依頼を受け、この一月十四日に「吟と剣詩舞」の披露をすることになり、同教場を中心に実施の運びとなっております。その成果が新たな輪の広がりにつながることが期待されます。

時節は正に寒気本番、会員皆様にはくれぐれもご自愛のうえ吟楽に努められますようお祈りいたします。

平成廿一年度運営基本方針

のびのび　わくわく　さわやか　ちよだ

鈴木会長より、十二月二日の幹事会で発表されました。スローガンの「のびのび　わくわく　さわやか　ちよだ」は今年も変わりません。

一、吟友拡大への取組み
　五拠点新設の目標を継続し完遂する。
二、教場活動の一層の活性化
　参加者率を高め、活気溢れる教場づくり（皆んなが主役だ吟楽教場）
三、諸研修の実施
　○教場長・副教場長研修－前半一回
　○選抜師範研修－年央一回
　○初期者研修－年二～三回
四、諸行事の持ち方
　温習会、担当教場制の検討

◎機構、組織、人事

一、新規設定職務
　ア、会長補佐主幹　補佐グループのまとめ役を委嘱
　イ、教場長主幹　教場の連携、強化のためのまとめ役を委嘱
　ウ、副会長を三名とし、専管業務を整備する
二、人事

会長	鈴木　龍成
副会長（総括担当）	耳塚　昇風
同（許証、弘報、総務、経理担当）	大熊　龍清
同（研修、事業、総務、経理担当）	○城戸　稲風
会長補佐主幹	○菅原　克風
会長補佐	菅原　龍琴
同	○前田　道風
同	酒井　帆山
会長補佐	徳本　順山
同	菊地　駿山
同	山口　隆山
同	○八田　玉山
教場長主幹	○山口　隆山
業務推進委員長	八田　玉山
業務推進副委員長	山口　隆山
同	○太田　翠風
同	○花山　桜風

研修部門リーダー	○前田　道風
許証同	徳本　順山
事業同	菅原　克風
吟楽同	二宮　祥山
弘報同	八田　玉山
婦人同	菅原　龍琴
総務同	酒井　帆山
経理同	菊地　駿山
同	武藤　孝泉

会計リーダー
（○印は新委嘱・新任者）

奥伝以上・師範審査が実施されました

今年も菊薫る文化の日にサンワークかながわで奥伝以上・師範審査が実施され、千代田より廿二名が受験。見事な成績で合格されました。お目出とうございました。

奥伝	菅原　龍琴	丸女
奥伝	山口　朱風	丸一
奥伝	二神　和風	丸一
奥伝	福田　伶風	丸一
奥伝	渋谷　辰風	東陽町
奥伝	前田　道風	東陽町
奥伝	青木　隆風	東陽町
奥伝	青木　洋風	東陽町
奥伝	赤根　惇風	東陽町
奥伝	大槻　鉾風	清水
奥伝	城戸　稲風	ハザマ
奥伝	上田　也山	東陽町
奥伝	渡邊　華山	清水
奥伝	二宮　祥山	ハザマ
奥伝	前田　達山	ハザマ
奥伝	緒方　泰山	錬水
中伝準師範	山手　遥山	丸女

武道館出場当日、靖国神社で急逝された西川宗山氏の告別式で宗家から、特に奥伝の許証が供えられました。

奥伝遺贈　故西川　宗風（清　水）

皆伝を拝受して

丸の内女子教場長　菅原　龍琴

去る十一月三日文化の日、師範及び奥伝以上の昇伝審査が実施され皆伝を認許されました。

入会当時を思いだしますと龍とは遠い遠い事のように思われ、及びもつかぬ事、諸先輩方の素晴らしさに、只聞き入るばかりでした。これも偏に諸先生の暖かいご指導の賜と感謝致します。

千代田岳精会では女性の「龍」の第一号になります。来年以降後輩が次々と続いて来ます。流統の精神を守り、名に恥じないよう務め頑張って参りま

す。雅号は飯田精鷹最高顧問より〝琴〟を戴いて居りますので、龍琴といたしました。

吟との付合いの結実

清水　大槻　鉾風

去る十一月三日、サンワークかながわで奥伝師範試験を受けた。

思えば先輩村上恒風さんのお誘いで岳精会に入門してから、満十四年が夢の様に過ぎ去った。偶々小学校に熱心な先生がおられ「鞭声粛々…」「山川草木…」等を剣舞と一緒に教えて頂いた。それから廿四歳の大学卒業迄、漢詩と詩吟が連綿と続いた。本格的な詩吟修得は勿論、飯田門下生としてからである。畢竟詩吟の節調が私の好みに合って、音楽といえば即詩吟なのだった。今回奥伝師範の許を戴くことになったことは、私の今日迄の吟とのお付合いが実を結んだ訳であり、吟の師範として客観的な地位が与えられたということなのだろうか。大変に大袈裟な表現ではあるけれども。

吟を詠いながら何時も思うことは、家元や宗家の吟が頭にこびりついているせいか、自分の吟と比較してその落差があまりにも大きいことである。家元や宗家は共に日本を代表する吟詠家なのだ。資質に恵まれ吟歴豊富なプロと経験未熟な自分を比較することが大体おかしいのだ。自分としてはこれからも家元・宗家のテープを常持して限りなく聞きまくろう。そのようにして、あと十年も続ければ、落差はかなり少なくなるだろうと思っている。果たして十年後の九十翁の自分の声帯は、この試練に耐えてくれるのであろうか。

更に上る一層の楼

銀座　渋谷　辰風

奥伝審査を受ける東陽町教場の同期四人は、当日朝九時前から午後三時の審査開始までの待ち時間を一緒に過ごしたので、久し振りの審査でも緊張することはなかった。

奥伝は実技のみで園田龍鵬先生の審査を受けたが、私の場合は今の儘で後輩の指導に当たって欲しいとの評を頂いた。川口カルチャーで宗家のご指導を直接受けてきた十年の成果を評価されたのだと痛感した。また園田先生の吟は誠に素晴らしく「更に上る一層の楼」の気持を触発させられたのも収穫だった。

準師範を許されて思うこと

ハザマ　二宮　祥山

千代田岳精会に無審査で入門を許されてから九年、先般中伝準師範の試験を受けさせて頂いた。五五年振りの試験である。諸先輩のご指導のお陰で答案用紙は埋めることが出来た。成績については不明であるが有難いことに免状が頂戴出来ると言う。

今までご指導頂いた諸先生や吟友達に心より感謝する次第である。然し乍ら困ったことに私には師範としての知識も器量も無い。かって某顧問の先生に「君の吟は揺れている、心が揺れて居るからだ」との指摘を受けたが、未だにその意味を解明出来ずにいる。また別の顧問の先生からは声が悪いとの指摘を受けた。これは良く理解出来る。つまり私には教師になる資格が無いのである。邦楽は口伝が基本であり、生徒は只管教師の真似をするのが正道である。声が悪くて揺れている吟など真似られては様にならない。

唯、私は吟が好きであり、吟の面白さを知っている。吟の楽しさ、面白さを多くの人に伝え知って貰うことで吟友を増やすことが出来れば師範としての責務の一端を果たす事になるのではないだろうかと考えている。そう言うことでお許し頂けれは幸甚である。

吟友を沢山作ることは楽しいことだ。

わが吟詠を目指して

東陽町副教場長　前田　道風

有難うございました。ご指導下さった諸先生、また吟友の皆さん。命を授けてくれた両親。奥伝許状をいただけました。

入会当時既に幾人かの「風」が太陽に煌めいて居られました。何時かはきっと奥伝にと決めたのです。大学での漢詩のオープンカレッジ、俳句・短歌の創作、中国美術工芸の勉強、詩吟につながる全てが楽しく夢中でした。川口カルチャーでの宗家のご指導に目が覚めました。なぞるのでない「らしい」吟に迷っていた私に詩心を自分のものとして個性を生かすようにと言うことでした。道遠しではありますが目標を持てたことに有難く思っています。

「世界遺産で詠おう」ということで、ここ十年程吟友と旅をしています。トルコのコロセウム、アンコールワット、ドナウ川船上での吟、それぞれ異った

た情景に詩情を託して、各人が汲上げて披露し合っているのです。沈黙のその過程が吟楽なのかとも思っています。

残すべき　何もなけれど　この吟に
ひとり頷き　そっととり置く

わが吟詠と言えるものを目指し、日毎にうたに手を入れている私です。心からありがとうと申し上げます。

奥伝審査に憶う

東陽町　青木　隆風

街路樹の銀杏が黄色に色付き秋の深かまりを感じる十一月三日、サンワークかながわで奥伝審査を受験しました。午前九時前に会場に入ると、既に大勢の受審者が受付を待っており、礼装の男女受審者の姿には気品と気迫を覚えました。流石に戦後の荒波を潜り抜けてこられた自信の証でしょうか。

扨て、私は詩吟と出会って以来、お陰様で十三年を迎えることが出来ました。入会当初は、多少距離感がありましたが現在は本当に身近かな存在になっております。平成十七年六段に昇段しましたが私の吟力は半人前にも満たない気がします。まず咽頭が弱く、また腹から出す声が続かない等など苦悶する時期もありました。そこで考え方を「吟は楽しむべし」と心気一転したことで気は楽に、咽頭も安定し、此頃は主に言葉の一つ一つを活きた言葉と詩情の表現に留意し乍ら奥伝審査に臨みました。「八月十五夜月前に旧を語る」を思い切り伝えたい気持ちを前面に出し終えました。園田先生から、起句転句について丁寧なご指導を戴き、今後、研鑽の糧にしたく思います。有難うございました。

私にとって奥伝は当初からの目標でありましたので大変光栄に存じます。今後は体力の続く限りこの重みを踏まえて頑張ります。

吟縁、吟友に心から感謝。宜しくお願い申し上げます。

夢を追求して楽しく

清水　渡邊　華山

「師範の資格を取得したとして、その抱負を述べよ」との問いに「盛唐の詩人王之渙の五言絶句〝鶴鵲楼に上る〟の結句〝更に上る一層の楼〟の気概を持ち、上位を目指し日々研鑽に励みます。その上で吟友に教えられる域に到達したい。教えると言うことは自ら学ぶことであり、私自身の吟力向上に繋がります」と答えました。

臆面もなく大仰な物言いと笑われるかも知れませんが、人間はこの地球上で唯一夢を見得る動物であると言われていますので、常に自分の夢を追い求めて楽しく生き抜くことは許されて良いと考えております。数多くの先生そして諸先輩から、長年に亘り懇切丁寧なご指導を戴き、今日まで詩吟を続け学べたことに深く感謝致しております。

誠に有難うございました。今後とも宜しくお願い申し上げます。

奥伝の許を戴くに当たり想うこと

丸の内第一　二神　和風

「今度奥伝を戴く事になったよ」と孫に話すと「奥伝って何なの」と問いが返ってきた。辞典を引くと先ず〝奥〟は〝入口から中へ深く入ったところ〟であって、又〝奥伝〟とは〝師匠から武道、芸道などの奥義を伝授されること〟とある。そこで奥義とは、又辞書には『学問、技芸、武術などの極みにある最も大事な事柄』とあって常識通りであるが〝極みにあって最も大事な事柄〟と言う文句がずしりと来る。

平成四年秋から林龍吾先生の紹介で、明治生命本社の歴史的建造物の中、千代田城を目前に見て飯田精鷹先生の情熱溢れる詩情豊かなご指導のもと律義な教場通いが続いた。それにしても此の年末で、十六年、途中入院手術もあって三年位遠ざかった時もあったが、これだけ続けられたと言うことは、共に歩んだ仲間の皆様の絶大な力の賜である。教場の外の会食、旅行、ゴルフ等、色々な会合があっても常に真善美を吟に求めようとする共通の心が絆となって引張ってくれている。

奥の字の付く地名で奥州、陸奥と言えば芭蕉最後の旅〝奥の細道〟が浮んで来る。いま、八十歳の初年に達し、歩み続けた年月に免じて、仲間の方々にお役に立てるよう、千代田岳精会の奥の細道に立ったつもりで、更に一歩踏み出したい。家庭にあっては、孫達に「人生の奥伝」を見せることが出来れば、これに過ぐる悦びは無い。

奥伝師範試験を受験

東陽町　赤根　惇風

十一月三日、文化の日　例年ならばラクビー好試合の応援にグランドに赴

いている処、今年はそうはいかなかった。奥伝師範の受験日である。幸いに慶応対明治の伝統戦が二日の日曜に行われたので、仲間と秩父宮に行ける幸運に恵まれた。しかし終わってからの一杯は欠席、珍しく真っすぐ帰宅、翌日に備え晩酌も我慢。徳本、城戸先生講習の暗記に専念。翌朝は憶えた事を忘れないようにソーッとした歩調で川崎の試験場に赴く。

筆記試験は予想通り、教わった通りの出題、一夜漬けの吟題作者名、梁田蛻巌作「千日紅を詠ず」詩文の大意を中国の千日も醒めない中山の銘酒と何とか思い出して、合格点スレスレだろうとホッと安心した次第。次は家元の面接、入会以来十四年（ラグビーの一線経験は十三年）遠くからお言葉を拝聴するだけで直接対話をしたことはない。しかも赤根、大槻、城戸の順序、一寸困った、深呼吸三回、エエィ成るようになれ！と腹を極めて面接。心配は無用だった。思った通りのイイ大先輩、立派な恩師、九二歳とは思えぬ若さと力強さを感じる十数分だった。

全て無事終わっての慰労会、参加者は若干少ない感があるも、磯田副幹事長が宗家をご案内、杯を交わす機会にも恵まれ有意義な文化の日であった。

奥伝審査を受験して

丸の内第一　福田　伶風

十一月三日、天気曇り、私の気持も同じだと思いつつ会場へ。定刻開会、家元の力強いご挨拶があり、宗家から説明がありました。吟技の審査を待つ間に指定吟二題を頭の中で吟じてみたら、暗記したはずの承句が出てこない電車の中では上手く出来たのにと益々不安になってしまう。

審査員の園田龍鵬先生より「指定吟の好きな方を」との指示で杜牧作「昔友を念う」を吟じました。しかし「節調は良いが起句が弱いのでもっと力強く、やり直して下さい」との指導を頂き、やり直して何とか無事終りました。ホッとするよりも今後の課題を頂き日頃の精進不足を反省した一日でした。

今から十数年前、吟を始めた頃はまだ現役でしたので、練習時間に毎回、三十分、一時間位遅れて教場へ行く始末で吟の良さ詩情など理解不足で、故井手先生に時間外に丁寧にご指導頂いたこともありました。ここまで続けてこられたのも飯田先生を始め諸先生方のご指導のお陰と感謝申し上げます。

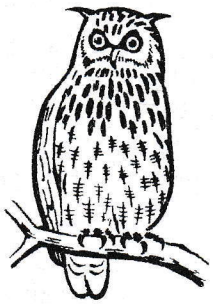
奥伝の名を汚さぬよう吟技の向上に精進し、楽しく続けて行きたいと思っております。

準師範を受験して

東陽町　上田　也山

十一月三日は準師範の試験日だ。学校を出てから試験なんて何年振りたろう。そう言えば六〇歳の時に宅建の試験を受けて以来のことだ。あの時は若い人に囲まれての試験だったので大変な思いをしたものだ。全国の人に交じって二時間の模擬テスト三回位受けて、いざ本番。発表会場は都庁一階広場だったな。あれから十一年経過しての今回の受験、緊張感は同じでも受験する人の年齢がまず違う、何か皆相当に落ち着いている。緊張しているのは私くらいのものか。

集合時間八時十五分川崎駅時計塔の下。下落合六時五〇分発、当然六時起床だ、普段は九時起床が普通で、最近こんなに早く起きたことは無い。これだけでも緊張してしまう。肝心の試験内容は事前に教わった程度の設問で、さほど心配なく終わる。恐らく満点近くは行っているだろうことは終わった段階で判った。問題は準師範に合格したとしての心構えの記述であった。その前に体や精神面を強くしたいので毎日実施している五瑞の散歩について、そしてサムエル・ウルマンの詩について「青春」とは人生のある期間を言うのではなく心の様相を言うのだ。優れた創造力、逞しき意志…中略…こう言う様相を青春と言うのだ。年を重ねただけでは人は老いない。理想を失うときに初めて老いが来る。永遠に若いつもりでありたい。



奥伝審査を終えて

丸の内第一　山口　朱風

十一月三日、奥伝審査に出席のため朝早く家を出ました。文化の日には珍らしく雲の重い朝でしたが今日まで学んできた事を精一杯吟じれば良いと思いました。朝早くから会場には大勢の

お仲間が見えました。開会で家元の力強いご挨拶に頭の下がる思いです。宗家の諸注意をいただき、私は午後審査となりましたが落ち着けませんでした。

午後の最後に吟じる時がきました。無事吟じ終えましたら、園田先生から「はい結構です」と仰言って頂きました。先生に五月から代々木に教室を開かせて頂いたとお話申し上げましたら「教える事によって自分自身が上達します」との言葉があり、大変心強く思いました。

教室へ来て下さった鈴木会長、大熊教場長から転句のみ注意して吟じるようご指導頂きましたが、お陰で当日は転句も声が素直に前に出て、大変嬉しくまた感謝申し上げます。これからも一人でも多くの方に声をかけて、自分自身の吟の向上の為にも励んで行きたいと思いました。

ご指導宜しくお願い申し上げます。

総本部夏期師範特別研修会
熱海に三四六名集結

八月廿三・四日この時季としては涼しい熱海温泉大野屋へ全国より三四六名が集い、夏期師範特別研修会が開催された。遠来の会員方からは、宗家の直接指導の貴重な機会に、少しでも多く学びたいとの気持ちが圧倒的な迫力となって伝わって来ました。

二日間にわたる家元の講話、宗家の廿一年度昇伝課題吟、渡指導本部長のコンダクター指導など密度の濃い内容でした。三八名と最大参加の千代田は懇親会の余興で阿波踊りで大とりを務め楽しい交歓の一時でした。

年男・年女

今年の干支は己丑です

吟との半世紀

副会長　大熊　龍清

はや六回目の干支を迎えることとなり、今更ながら吟詠生活との来し方を振り返り感に耐えない所であります。

人生の途中から詩吟との出会いで、大勢の吟友と知り合い交流を深めてこられたことは、何にも替えがたい宝物とあらためてしみじみと噛みしめております。千代田岳精会員として、創会時から廿数年に亘りますが、当初は一教場数名の会員でありました。しかし今や十教場のほか分室、分教場、吟詠クラブ等で会員数二〇〇名突破となり、当時は唯々飯田最高顧問を囲んで、楽しく吟を学び、吟力向上に努めていたところで、全く感無量であります。

また、私は学生時代に一時期大学吟詠部々員として活動していましたが、その時の流派は、横山岳精家元の師木村岳風の岳風流でありました。岳精流が同じ流れでありましたことは、これも何かの巡り合わせと不思議な縁を感じております。当時（昭和三十年代）詩吟は現在のように盛んではありませんでしたが、今や特に女性の吟詠家が目覚ましく進出して華やかになった事は時の流れをしみじみと感じます。

これからも更に吟力向上、楽しい千代田岳精会の発展に努力していきたいと思っています。

無題

丸の内女子　菅原　伸治

「光陰矢の如し」過ぎ去った日月は定年後二度目の干支を迎え、感慨にふける作今です。

「ギンノキョクチハシン△〇××」と叫びながらプラスチックの刀を振り廻していた入園前の孫、恐らく詩吟の練習に連れて行かれて覚えたものでしょう。それから七年、唐突な切っ掛けで習い始めた詩吟、その吟を通じて真善美を学ぶとは思いも寄らないことでした。しかし、諸先輩の熱心な指導、諸々の交流を重ねていくうちに「習うより慣れろ」で回数が増えるに従って詩を吟ずる心構えの大切さを思うようになってきたようです。

もともと喉に障害のある私にとって声を出すこと自体苦痛でありました。二本、三本と声を出して吟ずる諸先輩の声を聞いて羨ましく思い「自分も声が出れば積極的に勉強するのだが」と勝手に理屈をつけて、声の出る範囲で細々とやってゆけば良いのではと、詩を吟ずる精神とは遠く離れたものだったと反省しています。

やはり「無垢」に詩を吟じたい。「入魂」で詩を吟じたい。そうは出来ない私ですが、新年、初心にかえって頑張って参ります。

吟友の皆様、宜しくお願いします。

チャレンジの年に

清水　船津　英世

私は昭和十二年八月生まれで、今年

は干支では己丑歳に当ります。年男として元気で充実した一年が過ごせればと念じております。

さて、詩吟を始めて早二年が経ちましたが、声が詩吟に向かないのか不勉強のせいか、中々上達しません。先生方や諸先輩から、節調はまあまあとして声が腹から出ていない、転句で息切れがすると指摘され、目下当面の課題として鋭意研鑽に励んでいます。

昨年からコンダクターの研修会に参加していますが、伴奏の方が上達が早そうです。最高音の音や詩のアクセントのある箇所は、強弱ではなく高低を表現するものだとコンダクターを弾くとよく分かります。

自宅に近くに日本女子大の生田キャンパスがあり、隣接する森に出かけ鳥達のさえずりの伴奏の中で一人大声で吟ずると何とも気分爽快になります。この時はうまく吟じたと満足出来るのですが、人前に出ると力が入るのか緊張するのか納得する吟が出来ません。

清水教場では今だに末席に甘んじていますので、早く新会員を勧誘しないといけないなと痛感しております。今年は岳精会の研修会等に積極的に参加してレベルを向上させ、コンクール入賞を目指しチャレンジするつもりです。

今後とも先生方諸先輩のご指導をお願い申し上げます。

「3ゴ」から「3G」へ

新宿　加納　隆

マスコミ界を卒業するに当って二点考えた。もう宮仕えはせず、ボランティアで行こう。もう一つは「3ゴ」と少し真面目に取組みたい、であった。

前者の方は、定年後に友人の誘いで参加したNPO「JAPANNOW観光情報協会」の機関誌の取材、編集を無給で手伝っており初志を貫けているようだ。

で、一方の「3ゴ」は、どうなったのか。まず「3ゴ」とはなにか？一つは語学の「ゴ」旅行が好きなので、数か国語を習い、世界各地を歩いてみようと思った。次の「ゴ」は囲碁、頭脳を鍛えるのに適しているだろう。三つ目の「ゴ」はゴルフ。足腰をしっかり保つのに向いている筈である。こうして手、数年続けているうちに、まず「語学」（旅行）で脱落した。根気と資金が続かなかったのである。

そんなとき、学友の酒井帆山氏から「詩吟をやってみない」と誘いがかかった。「GIN（吟）」である。そこで、少し方針変更となった。よし「3ゴから3G」だと。以来、友人に会うと「3Gの奨め」を説いている。「GOLFは体にいいよ」「GOはボケ防止になるよ」「GINは大きな声を出すので健康的だし、楽しい」と。

「3G」どれをとっても下手の横好きで半人前以下だが、少なくとも七回目の丑年（八十四歳）までは続けていたいと思う今日この頃である。

石の上にも三年

鎌ヶ谷　柳川　交司

六回目の年男、同じ職場で一緒だった荻先輩が、鎌ヶ谷に詩吟教室を開設した事をメールで知り、お祝いに伺った処、詩吟は健康に良いからと勧められ入会しました。あれから三年が過ぎ、今では日課のウオーキングで二〇分位吟じたり、気分も楽しく、皆んなで吟ずる金曜日が待ち遠しくなるなど、いつの間にか、詩吟が趣味の真中にデンと居座っていました。

漢詩の持つ様々な詩情、詩心を朗々と吟ずる諸先輩に少しでも近付きたく「この道より我を生かす道なし、この道を歩く」この道を吟の道と捉え、丑年らしく、ゆっくりと努力、研鑽いたします。老いは忘るべし、又忘るべからずの年齢を意識しながら「桃栗三年、柿八年、達磨九年、俺吟一生」を迎えが来る迄、吟縁により得られた吟友の皆様と楽しみたいと思っています。

詩吟修得手帳が一冊も終わっていない私ですが、腹の底から大きな声を出し精進しますので、諸先生、諸先輩そして鎌ヶ谷教場の皆様、ご指導を頂きますよう、宜しくお願い致します。

星野久山（清水）

丑年を迎えて

新宿　後藤　優

干支の年男を迎え過去の丑年を振り返ると、それぞれの丑年に人生の区切りを感じさせる出来事があった。最初

の昭和廿四年・一九四九年は、終戦直後疎開先から数回の転居を重ねた後父の仕事の関係でやっと長野の田舎に落ち着いて生活を始めた頃であった。小学校で「いじめ」に遭いながらも楽しい少年時代を過ごしはじめた。

次の昭和三六年・一九六一年は大学四年生で思い出深い学生生活最後の年であり、就職先と結婚相手を決めた年でもあった。昭和四八年・一九七三年には子会社に出向を命じられ新しい仕事に挑戦した年であり、昭和六〇年・一九八五年は、仕事のみならず子供達の教育面でも最も忙しく且つ充実した年であったと記憶する。そして平成六年・一九九七年に定年退職した。その後現在に至る十二年は、旅行会社勤務の後ラオス滞在のボランティア活動を行い、帰国後は地域への恩返しで自治会の役員等を続けている。

さて、平成二一年の丑年を迎え、区切りの年だったと将来言える様な事は何かと現在模索している。詩を吟じて精神的にも肉体的にも健康を続けていくつもりであるが、人と共に生き、楽しむこしに変わりないことは確かである。

干支と置物

東陽町　上田　也山

今年の干支は丑年だ。私も丑年生れなので置物の一つぐらいは持っている。数年前亡くなった小渕恵三総理は同じ丑年うまれで牛に因んだ物を五千個集められていて、ドイツのシュレーダー首相が訪日した際にガラスの牛をプレゼントされているニュースを見たことがあります。写真には高村光太郎の詩「牛」の額を中心に沢山のコレクションを前にした、あのにこやかな笑顔の小渕さんが座っていました。これに比べると私のはたったの一つです。高岡銅器の三〇㌢位ある立ち牛です。それも津田大寿、富永直樹（文化勲章受章者）のような大家の作ではなく、名も無き作家の品です。しかし私には雄々しい立派な立ち姿に見えるのです。家での評判はあまり良くなく、ブランド牛の店先に出ている看板牛の様で、筋骨隆々とした牛位の評価しかありません。今年は一つ太宰府天満宮御神牛に似せて、臥牛にでもしょうかと考えています。天満宮には御神牛が沢山います。実は祭神の菅原道真公が丑年生れ承和十二年（八四五）乙丑　五月五日生れです。しかも道真公五七歳の春に亡くなられた時に亡骸を乗せた車を引いた牛が突然動かなくなりました。そこにご遺骸を葬り、人々は道真公を慕って墓の上に社を建て祭りました。これが現在の太宰府天満宮の始まりです、ご神牛が多いわけです。居所跡の榎社境内には道真公作のあの有名な「九月十日」の歌碑が建っています。

私と詩吟について

代々木　土田　昭子

私がこのクラブへ入会したのは、不思議な気がします。昔から私は音痴で兄弟が三人、私は二番目なのですが、他の三人は何時も学芸会等で独唱などさせられておりました。私は楽譜は読めるので、何時も先生のピアノの横に立って楽譜をめくる役目でした。

こんな私が何故詩吟を始めるようになったか？と申しますと、私の義理の弟が、詩吟をやっておりまして、詩を吟じていると、とても心が落ち着いて気持ちがスッキリすると聞かされていたからです。そして、お友達に誘われたものですから、何となく始めてみようかな：なんて考えて入会した次第です。こんな下手な私でも何度か吟じている内に、詩吟の面白さが判ってきたように思います。下手は下手なりに、何とか大きな声を出して吟じている内に、吟じた後の気持ちの爽快さという事に気が付きました。これからも声が出る間は、詩吟を続けて行こうと思っています。

今後ともご指導の程宜しくお願い致します。

年女になって

東陽町　荒井　さい子

今年二〇〇九年は己丑で年女となりました。東陽町教場に入会させて頂いて早くも一年四カ月目を迎えました。その間二人の仲間をお連れいたしました。お二人とも詩吟に大変努力されておられ、嬉しく思っております。

私のほうはいまだ仕事を持っている関係上、お二人とのチームプレイも不十分でしたし、吟の方も一人で吟じられる自信も今ひとつの状況です。このことが詩吟面での大きな反省点です。この反省点を今年は努力して乗り切ってみようし考えております。

年女にとって今年は良い年でありますよう願っております。新しい年も、ご指導の程宜しくお願いいたします。

平成廿年度温習会

新会員の皆さん溌溂と登壇

今年の温習会は、各教場の新会員の皆さんが多く登壇出来るよう担当の丸の内第一、東陽町、丸の内女子、鎌ヶ谷教場で綿密な企画が重ねられ開催となりました。参加会員一九二名、ご来賓としてお迎えした埼玉岳精会林龍勝会長、武蔵岳精会杉山龍英会長　教場の招待者を会わせると二〇〇名を超える参加者でした。一一八の演目はコンダクター、剣舞、歌唱研修等が構成吟ほかに組み込まれた千代田の特色がよく現れたプログラムで、整然とした進行は会員の結束力がよく現れていると言えます。今回は無伝、初伝者の独吟コンクールが実施され後記の方々が入賞の栄誉を獲得されました。

担当された皆さんいろいろと本当に有難う、ご苦労様でした。

次年度に残された課題は、参加者二〇〇名以上を収容出来る会場及び懇親会場をどうするかです。

初伝の部　優勝　小林　公泉（神田）
二位　西山　定泉（清水）
三位　大井　俊泉（草加）
四位　小林　明泉（東陽町）
無伝の部　優勝　中内　博司（ハザマ）
二位　森山　俊雄（丸女）
三位　松尾　洋輔（ハザマ）
四位　宮川　武郎（神田）
五位　田尻　映代（丸二）
六位　小佐々　隆（新宿）
七位　本荘　明日香（銀座）
八位　望月　輝夫（清水）

九位　犬飼　勇雄（ハザマ）
十位　本多　京子（神田）

温習会独吟コンクール初伝の部優勝

神田　小林　公泉

千代田岳精会に入会しましたのが平成十七年四月、他流から入会したばかりで岳精流の素晴らしい節調に馴染まず他流の癖が出て、ゆり止め、山、アクセント等あまり出来ないのに一回目の無伝のコンクールに出場して、今回は二回目の出場で優勝出来ましたのも林龍吾先生、池田康山先生の手厚いご指導の賜物と感謝しております。今回の良き指導のお陰だと感謝しています。でやっと岳精流の会員になりつつあるかと嬉しく思います。

私は初めての吟は中々吟じられず苦労しています。コンクールに出場すると言うことで毎日「千日紅を詠ず」を思い、千日紅の花を植えました。何十回も練習し努力することが大変良い勉強になります。池田教場長のお勧めでコンダクターの練習をしているうちにルールで歌詞カードを持ってよいこと、吟じ始めてから二分二秒以内で吟じ終える等がプレッシャーの緩和につながりました。これが功を奏したのか愈々出番、自然体で時間内に無事吟じ終えることが出来たのだと思います。

今後も出来る限り努力して参りますので先生方はじめ諸先輩方々のご指導宜しくお願い申し上げます。

廿年度温習会コンクールに優勝

ハザマ　中内　博司

ハザマ教場に入門して満三年、今回独吟こんくーる無伝の部に出場、思いもよらない優勝の結果に思わず心の中で万歳を叫ぶ自分がいました。独吟コンクール出場は昨年三月に行なわれた吟剣詩舞道港区予選に続き二度目ですが、今回の優勝は前の経験（舞台度胸）が生かされた事と会長はじめ教場長並びに教場諸先輩方（特に二宮祥山さん）に懇切なるアドバイスを頂きました。

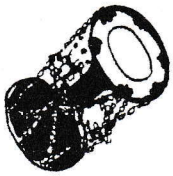
出場吟題は「昔友を念う」本数は二本でした。コンクールに臨むに当り、以前より「声は午前より午後の方が出ますよ」と聞いており、午前での吟詠に対して、声の不安がありましたが、開会直後の会詩合吟でその確認をする事が出来たこと、またCD伴奏による出だしの音合わせ、絶句、吟詠時間等多くの不安要素をも抱える中、今回の節調、アクセントも少し理解出来るようになりました。

未だ岳精流節調、発声等において未塾の要素が自身山積しております。今後更なる精進を重ねて参る所存ですのでご指導ご鞭撻の程宜しくお願い申し上げます。

吟剣詩舞道大会
武道館合吟コンクール

今年は、総本部男子が「社友小集」福沢諭吉作で挑戦した。千代田から十八名が五月からの厳しい訓練に参加し当日に臨んだ。その朝、集合した靖国神社境内で、西川宗風氏（清水）が突然倒れられ、急逝されたことは痛恨の極みであったが、その雄魂と共にと舞台に上がったメンバーはトロフイーまであと一歩の四位と大健闘であった。

出場の皆さんが、本部練習で得たものは、今後の大きな資産となったことと思います。来年の捲土重来を期待しましょう。



全国吟詠コンクール
武道館大会に出場して

丸の内第二　蒐場　直一

去る、十一月九日武道館にて全国吟道大会が開催され、コンクールに出場出来ましたことは、誠に光栄でありました。これも、ひとえに岩崎先生をはじめ、山口教場長ほか先生方、また諸先輩方のご指導の賜物と、深く感謝しております。

思い返せば、五月十三日約五〇名のメンバーが集合し、第一回の練習が始まりました。その時宗家から次のようなお言葉を頂きました。「集中して吟ずること」「ベストを尽くすこと」でした。この言葉を念頭に置き、そうそうたる先輩の皆様の中で、唯々声を出すのみでした。日頃二本の私にとって練習は三本とか、時には四本に近い時もあり、転句のころなどは頭がクラクラし、ハット我に返ることも、時々ありました。おかげで一二回の練習も休むことなく、また練習を重ねるにつれ段々と声が出るようになり、皆様について行けるようになりました。

園田先生の指導のもと、五か月半も忽ちのうちに過ぎ、大会本番も間近になり、十一月四日の最後の練習日に家元にご披露をし、その時「吟とは、魂を籠めて吟じ、魂の叫びである」との お言葉を頂き、感動し勇気を頂き、万然の態勢で、十一月九日の本番を迎えることが出来ました。

結果は全国合吟コンクール第四位と言う大きな賞を頂き、大会出場初めての我身には夢のようでした。この六か月の間、大勢の先生、また諸先輩の方々にお会いできご指導頂いた事を感謝すると同時に、今後研鑽と精進に努めたいと思います。ご指導、ご鞭撻のほど宜しくお願いします。

第四一回全国吟道大会に参加して

ハザマ　山本　薫泉

大会は平成二〇年一一月九日、午前九時から開催された。岳精流本部男子は今回出場の全国四九団体の中で四位となった。若干の不満もあったが男子の一位という事で溜飲を下げました。

メンバーの結成にあたり、各教場から集められた約六〇名程の吟友に、宗家から優勝の期待を込められた激励があり、吟題が、福沢諭吉作「社友小集」園田龍鵬先生の指導と決定。模範吟が披露され、大会に向かってスタートが切られた。午後六時半から八時過ぎまで又日曜日も返上し、大変実のある稽古が続き、熱のこもった園田先生の指導に一つの目標に向かって楽しく稽古が出来たのではと思いました。千代田の吟友十八名は殆ど休むことなく参加しました。この数は大いに誇れる存在だったと思います。同時に参加の吟友は日頃の稽古と違った経験が出来、大変有難い思いでした。平均年齢も七〇歳近いメンバーが出場した事も、元気づけられた事でしょう。

大会当日はリハーサルのため、武道館に近い靖国神社の境内に朝七時に集合が掛かり、殆どの人は朝四時起きで駆付け十五分前頃には揃い、リハーサルの準備に入りました。家元、宗家もお見えになり始めようとした時でした救急車のサイレンが鳴り、前回もこの時間に、観光バスと乗用車の事故があったので、又かと他人事の様に思いましたが、いやな予感を感じました。清水教場の徳本さんから始まる前に「西川さんを見ませんでしたか？」と聞かれ小生にトイレの場所を尋ねられたのでその旨をお話しした矢先でした。西川さんが倒れられたという報と共に救急車で病院に搬送された事に皆の驚きは格別でした。この朝は真冬の寒さでしたので体に障ったことでしょう。突然のアクシデントで人数ぎりぎりの所でしたが、会場へと向かいました。途中で西川さんの訃報に接し、まさに弔い合戦となり、西川さんの無念を晴らす

ためにも皆心を一つに吟じました。
今回のようなアクシデントは又と無いことを願い、苦い思い出となりましたが、一所懸命頑張って後進の指導をされていた姿が思い出されます。
また、稽古の最終日清水教場の徳本さん、西山さん、ハザマの萩原さんと四人で元気に一献を交わし語り合ったと聞きました。西川さんのご冥福を祈りつつ。

合掌

盟友西川宗風の死を悼む

清水　湯山　申山

十一月九日、日曜日の早朝村上前教場長から西川氏急逝の知らせを受け、早速令夫人に弔慰を電話で述べたところ、殊勝な応答に吃驚しました。
故人との因縁は彼が昭和六十年末、土木部門親睦の「清朗会」に入会されたのが契機で、吟歴は清水教場発足当時平成八年十一月頃彼を勧誘し、璽来共に吟道に励んで来ました。
彼は大人の風格を具備し、土木技術者の緻密な頭脳の持主。本数は「3」を堅持し、コンダクターは荻裕風先生のサブリーダーとして頑張っていました。
この度の逝去に対し、家元・宗家から過分のご配慮を賜わり、然も特進の「奥伝」の許証を霊前に供えて頂きました。遺族に代わりまして深甚なる謝意を申し上げる次第であります。

追悼句

夢うつつ　哭けよとばかり
虎落笛（もがりぶえ）　得自楼

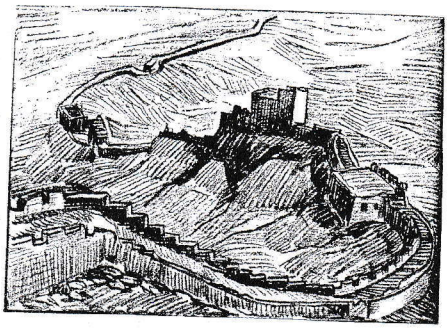
漢詩（十二）

ハザマ副教場長　前田　達山

雑詩　陶潛

人生無根蔕　飄如陌上塵
分散逐風轉　此已非常身
落地為兄弟　何必骨肉親
得歡當作樂　斗酒聚比鄰
盛年不重来　一日難再晨
及時當勉勵　歳月不待人

「作者」陶　潛（三六五～四二七）字淵明、一説では名淵明、字潛。江西省潯陽生まれ。幾度かの出仕を除きこの土地を離れず、多くの詩は此処で作られました。東晋から宋までその清潔な一生を称えて、人々は「清節先生」と諡している。彼の曽祖父は晋の名将陶侃であり、母方の祖父は一世の風流人孟嘉であったと言われいてるが、当時出世の絶対条件である門閥には当たらず、小地主階級の出身と思われ就いた官職もごく低いものであった。
作品の百三十余首は殆ど五言絶句で処世訓的なもの、田園生活と交友、政治、風俗の堕落を慨嘆するもの、古来の英雄を称えるもの、酒を汲みながらしみじみと感慨に耽るものなど多岐に亘っており、唐代の自然派の源流として多大な影響を残した。この他「帰去来兮辭」や「桃源記」などの文が今に伝わっています。
「語釈」雑詩＝一種の無題詩、根蔕＝木の根や果物のへた、確りと繋ぐもの、飄＝風にさっと散る形容、常身＝永遠に変わらぬ体、落地＝この世に生まれ落ちる、比鄰＝近所の人々、斗酒＝斗は酒を汲む器の名、大杯になみなみと注いだ酒という意、及時＝しかるべき時に、チャンスを逃すことなく、
「通釈」人の命は、確りと何かに繋ぎ止めてくれる木の根や果実のへたに当るものとて無く、一寸とした風にもサッと散る路上の塵の様なものだ。風の間に間にまろび分かれ散る人間、それはもはや永遠に変わらぬ姿を保ち得ぬ。
だが、いや、だからこそ、この世に生まれ落ちては、全ての人が兄弟としての完全な連帯感を持つ。それは必ずしも血を分けあった人々だけの事ではない。歓楽の機会を得ては、楽しみ尽すべく、なみなみと器に満ちた酒に、近所の仲間の集いをもとう。盛んな若い時代は二度とやって来ぬ。一日に二度の朝は無いのだ。この機会に充実した時間を過ごしておかねば、時の流れは人を待ってはくれぬ。
「余談」末四句は少年に学を勧める教訓として利用されているが、作者の意図に反する（陶淵明全集松枝茂夫訳註）



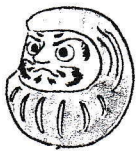
全国吟道大会に参加して

新宿　後藤　優

旧友に勧められて詩吟を始めて約一年が過ぎ、この度全国吟道大会に初めて参加しました。これ程多くの岳精会会員が全国の津々浦々で吟道に励んでいることに先ず驚きました。妻や私の故郷である天童や長野からも参加者がおり、顔見知りの方は見当たりませんでしたが、懐かしく過去を振り返らせてくれました。

私は、現段階では吟ずることで楽しさを味わい、形を大切にして情感を合わせ持つことに心がけています。しかし、大会での先達の吟を聴き、自分も他人に聴いてもらえる様な張りのある声に少しでも近づけたら幸せと思いました。

声を出すことが健康に良いと確信しています。全国大会では、私よりご高齢と思われる多くの会員が、矍鑠としておられる姿を拝見し、心強く思いながら会場を後にしました。



『新会員紹介』

◇東陽町教場

鵜飼　輝夫氏（十月入会）

東京生まれの、東京育ちチャキチャキの江戸っ子、その上ご母堂は十八歳で長唄の名取となられ名手と言われた方、その将来性は言うことなし。かっての仲間と今ここに再会が嬉しいと紹介者の大田晴風氏の弁。

◇東陽町教場神楽坂吟詠クラブ

中山　靖子さん（九月入会）

新宿区広報を見て当吟詠クラブを見学。そのまま入会して頂きました。他流派の吟歴をお持ちで、声量、音程とも基礎はしっかりしており期待の人です。電動車椅子を自在に操りながら熱心に吟詠クラブに通っています。

袖井　林二郎氏（九月入会）

中山さんと同じく新宿区広報を見ての入会、昔聞きかじった詩吟をあらためて勉強しようとのことで来られました。国際的な大学者でしばしば外国に出かけられており「マッカーサーの二千日」はじめ多数の著書を出されているという異色な経歴の方です。

◇ハザマ教場

井田　舜治氏（七月入会）

最近は韓国の王朝時代のDVDに凝っています。趣味のゴルフのハザマ社友会「青山会」で七〇台が出たのを機に新たなる挑戦・詩吟の会に萩原先輩から誘われていました。自信が持てず無縁と思っていましたが旅行で二宮祥山先輩の吟を聴き感動して入会することに決めました。

◇新宿教場

田村　節子さん（九月入会）

「詩吟、楽しいわよ」と声をかけて下さったのは、かっちゃんこと手塚勝子さんでした。教室の雰囲気は終始笑いに包まれ、しかも皆さんとても熱心で楽しく参加させて頂いています。詩吟に出会えて良かったと感謝しております。

◆西川宗風氏（清水教場）

十一月九日武道館合吟コンクール出場の為集合した靖国神社境内で、急逝されました。享年八十歳、ご冥福をお祈りいたします。

◆坂本天泉氏（ハザマ教場休会中）

十一月十七日ご逝去されました。享年八二歳、ご冥福をお祈りいたします。

編集後記

アメリカ発の経済破綻が、全世界に蔓延して未曾有の大不況の荒波が押寄せている。ヘッジファンドと言う魔物が我物顔に支配して、巨額のマネーで禿鷹の如く他国から利益を吸い上げたシステムが崩壊し、底無しの不良資産で各国が恐慌に陥っている。比較的健全と言われた日本にも大きな影響が及んできた。その一番の被害者はロストゼネレーションと言われた三十代の非正規雇用者だ。この世代を生け贄にバブル後の不況から立ち直った日本経済が再び彼らを切捨てようとしている。規制緩和と称して、とられた政策で産業界の活性化が効果を上げたことは評価されよう。しかし、その陰で外国資本の支配が進み、格差が拡大した。

小泉元首相の残した負の遺産の処理が出来ないと、日本の将来は開けて来ないだろう。政権争いに終始している政治屋達は国民にとり有害無益と言ったら過激でしょうか。国家の繁栄、国民の安寧に命を賭けるリーダーを期待するのは無い物ねだりだと情けない気がします。（八田）